

池干しによる外来魚駆除後の状況について

鳥取県栽培漁業センター 福本一彦

目的

池干しによるオオクチバスの駆除効果について検証する。

方法

鳥取県鳥取市玉津の本谷池において、2008年11月2日に池干しによるオオクチバスの駆除を行った。その後、2011年9月25日に再度池干しを行い、オオクチバス駆除前後で採捕種や体長組成を比較した。

なお、2009年10月4日に本谷池下流に位置する醍醐池にて、池干しが行われ、この時に採集されたコイ、フナ属、ドンコが本谷池へ移植された。

結果および考察

採捕種の個体数比および重量比

2008年は、オオクチバス、トウヨシノボリ、スジエビ、サワガニ、ミシシippアカミミガメ、カメ目などが採捕され、オオクチバスが個体数（1102 個体）、湿重量（32,587g）ともに最も多く、在来種と考えられるトウヨシノボリ、スジエビ、サワガニはわずかに認められる程度だった。

一方、オオクチバス駆除3年後の2011年は、前述の2008年採捕種からミシシippアカミミガメ、カメ目を除き、ドジョウ、フナ属、コイ、ドンコ、クサガメおよびウシガエル（幼体）を加えた種が採捕された。個体数比は、スジエビが78,763 個体（単位個体数あたりの重量から推定）を占めて最も多く、ドンコ、トウヨシノボリがそれに次いで多かった。オオクチバスは1 個体のみ採集された。重量比はコイ、スジエビ、ドンコの順に多かった。

体長組成

オオクチバスの体長範囲は、2008年採捕魚が74-430mmで、101-104mm、240-260mm および400mm前後にモードが認められ、池内で再生産しているものと考えられた。2011年採捕魚は、体長が330mm、耳石切片による年齢査定が2⁺であったことから、2008年の池干し時に駆除し損ねた個体ではなく、密放流された個体である可能性が示唆された。

一方、在来魚と考えられるトウヨシノボリの体長範囲は、2008年採捕魚が27-52mmで、計測した5 個体中4 個体が体長39mm以上の中-大型個体であったが、2011年採捕魚の体長範囲は14-38mmで、モードが20-24mmに見られ、小型個体が多く認められた。

その他、ドジョウ、ドンコ、コイ、スジエビも大型個体に加え、小型個体が多くみられ、再生産後も順調に成長しているものと考えられた。

以上の結果から、池干しによる外来魚の駆除により、在来種や移入種が再生産を行い、その後も順調に成長している可能性が示唆された。

一方で、外来魚の密放流は、外来生物法施行後も依然として続いているものと推定され、釣り人や県民への普及啓発、監視の強化および定期的な池干し作業の継続が必要であると考えられた。

*本調査は鳥取県の「外来種防除事業」の一環として行った。